

愛媛県松前町方言のアスペクト表現

— ヨル・トルを中心として —

高橋 顕 志

0. はじめに

本論では、愛媛県伊予郡松前町の老若両方言における、動詞連用形+ヨル・動詞連用形+トルを中心としたアスペクト体系を明らかにするとともに、そこから生じる二・三の問題点について考えたい。

『言語研究』第15集、「国語動詞の一分類」において、金田一春彦氏は、共通語におけるアスペクト辞「～テイル」の接続と、その結果表現される意味とによって、共通語で使用されている動詞を意味的に四分類した。

これは、個々の動詞が、時間の観念を持っているか、いないか、持っているとするれば、それが「継続的」なものか、あるいは「瞬間的」なものかを明らかにしたものである。これによる動詞の分類を次に挙げておく。

- I 状態動詞 「～テイル」がつかない動詞。「有ル・切レル・話セル……」。時間を超越した観念を表現する動詞。
- II 継続動詞 「～テイル」がついて動作・作用が進行中であることを表現する動詞。「書ク・読ム・降ル……」。動作・作用が、ある時間内続いて行なわれる種類の動詞。
- III 瞬間動詞 「～テイル」がついて動作・作用の結果が残存していることを表現する動詞。「死ヌ・届ク・決マル……」。動作・作用が、ある瞬間に終わってしまう種類の動詞。
- IV 第4類動詞 常に「～テイル」がついた形でしか用いられない動詞。「ソビエル・スグレル・曲ガル……」。時間の観念を含まない。物がある状態を帯びることを表現する動詞。

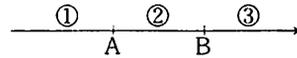
これらは、もちろん、共通語の動詞に関する分類であるが、松前町方言の記述に際しても、非常に参考になる。以下、この分類をもとにして、記述を進めることとする。

1. 松前町老年層方言のアスペクト体系

松前町老年層方言では、アスペクトを表現する形式

として、「～ヨル」・「～トル」・「～ハジメル」・「～ダス」・「～テシマウ」・「～トク」・「～テアル」・「～タール」などが使用されている。本論では、その中でも最も基本的なものとしてその機能を果たしている「～ヨル」・「～トル」について見る。

分析に先だって、次のような作業基準を設定しておく。



横軸、右方向に時間が経過するものとする。Aが、動詞の表現する動作・作用のはじまりを示し、Bが、そのおわりを示す。従って、①の部分は、動作・作用がまだ起こっていない時間を示す。いわゆる未然の部分である。②の部分は、動作・作用が現在進行中であることを示す時間である。動詞の種類によっては、この部分を認め難いものもある。③の部分は、動作・作用が既に終了した時間を示す。いわゆる已然の部分である。

以下、挙げる例文には、それらがどの部分を表現しているのかを、①・②・③で示す。

まず、継続動詞「書ク」・「聞ク」について見る。

1. イマ、ジィ、カキヨルンジャケン、ウゴカスナヤ。(今、字を書いているのだから、動かさないでくれよ。)——②
2. エエジィ、カイトルナア。(上手な字を、書いているねえ。)——③
3. ヒトノハナシ、ヨーキキヨラナイカンゾナ。(人の話は、良く聞いていなければいけないよ。)——②
4. ヒトノハナシ、ヨーキイトルケン、ヨーワカッタライ。(人の話を、良く聞いているから、良くわかっているよ。)——③

これらの例より、「継続動詞+ヨル」は②、すなわち進行を表現し、「継続動詞+トル」は③、すなわち已然を表現することがわかる。

次に、瞬間動詞「死ヌ」・「決マル」について見る。

5. アソコデ、ヒトガシニヨル。(あそこで、人が死にかかっている。)——①

6. アソコニ、ヒトガシンドル。(あそこで、人が死んでいる。)——③
7. コッカイデ、イマ、タバコノネアゲガキマリヨロゲ。(国会で、今、煙草の値上げが決定されようとしているだろう。)——①
8. キマツトルコトハ、マモラナイカン。(決まっていることは、守らなければいけない。)——③
- これらの例より「瞬間動詞+ヨル」は①、すなわち将然を表現し、「瞬間動詞+トル」は③、すなわち已然を表現することが明らかとなる。

ところで、先の継続動詞にも、詳しく見れば、次のような用例を見つかることができた。

9. アーッ、カキヨル。ハヨイツテ、トメナ。(あっ、書こうとしている。早く行って止めなければ。)——①
10. モーチョットデ、コノカミイ、ジイ、カキヨッタ。(もうすこしで、この紙に、字を、書くところだった。)——①
11. キカイデモエーハナシ、モーチョットデ、キカサレヨッタ。(聞かなくても良い話を、もうすこしで、聞かされるどころだった。)——①

これらの例は、「動詞+ヨル」で①の部分表現したものである。この意味の現われ方は、「瞬間動詞+ヨル」での意味の現われ方と全く同じものである。「書く」「聞く」などという継続動詞に分類されるものでも、このように、文脈によっては、瞬間動詞として使用されることがあることに気付く。

金田一氏の動詞の分類では、四種の動詞に、次のようにでも表記すべき意味素性を認めたと考えることができよう。

- I 状態動詞 [-時間・+状態]
 II 継続動詞 [+時間・+継続]
 III 瞬間動詞 [+時間・-継続]
 IV 第4類動詞 [-時間・-状態]

しかし、上の松前町老年層方言の例でも明らかのように、II 継続動詞の素性のうち、[+継続]の素性は、文脈によっては[-継続]になることもあるのである。こういう例は、共通語の継続動詞の場合でも、文脈を限定しさえすれば、すぐに見つかる。

12. そんな本は、読んではいけません。
 13. いつからその本を読みますか。
 14. お父さんは、もう帰っている。
 15. まだ帰っていないから、今度にして。
 12・13における「読ム」は、「読みはじめて読みおわる」という意味ではなく、「読みはじめる」まさにその

時点に注目点があり、いつ「読みおわる」のかについては、問題にしていない。14・15における「帰ル」も、「帰りはじめて帰りおわる」という意味で使用されているのではなく、ここでは「帰りおわる」という時点に大きな注目点があるのである。

このことから、先の継続動詞に関する意味素性は、[+時間・+継続・-継続]とでも書き改められなければならないだろう。

なお、この[-継続]の素性は、文脈によって現われる素性であるから、文脈素性として、別に処理すべきものであるという説も成り立つかもしれない。しかし、[+継続]の補集合としての[-継続]が文脈素性であるなら、[-継続]の補集合としての[+継続]も文脈素性となり、用語はどうあれ、両者は、全く同一のレベルの素性となるのは明らかである。私は意味素性を広く考え、その語が持っているあらゆる可能性から導き出されるものを記述しなければならないと考えている。一見矛盾する[+継続][-継続]は、本来その動詞の中に含まれており、それが具体的な場面・文脈に出現するにあたり、具体的な場面・文脈によって、どちらかが抑圧されるのだと考える。9～15における「書く」「聞く」「読ム」「帰ル」などでは、文脈によって[+継続]の素性が抑圧されている例である。金田一氏が、この類の動詞を継続動詞と名付けたのは、たまたま[-継続]の素性の抑圧された文が目につきやすかったからにすぎない。

一方、「瞬間動詞+ヨル」で②、すなわち進行を表現することは、まずない。従って、瞬間動詞に関する[+時間・-継続]という素性は、書き改める必要がない。

松前町老年層方言には、「書く」「聞く」「死ヌ」「決マル」にヨル・トルのついた形で、さらに、次のような用例も見いだせる。

16. マイニチ、ニッキカキヨル。(毎日、日記をかいている。)
17. (記録等を見て)コノヒトハ、マイニチニッキカイトル、エライナア。(この人は、毎日、日記を書いている。偉いなあ。)
18. イッツモ、センセーノ、ハナシハ、ヨーキヨラナイカンゾナ。(いつも、先生の話は、良く聞いていなければならぬよ。)
19. ワシャ、イッツモ、センセーノハナシ、ヨーキートルケン、ヨーワカットライ。(俺は、いつも、先生の話は、良く聞いているから、良くわかっていよ。)

20. マイニチ、センサーデ、ヨーケヒトガシニヨツタ。(毎日、戦争で、たくさん人が死んでいた。)
21. (記録等を見て) エヒメノヒトモ、ダイブ、マンシューデシンドルナー。(愛媛の人も、たくさん、満州で死んでいるねえ。)
22. チカゴロハ、マイトシコクテツノネアゲガキマリヨルガ、アリヤ、ドーシタモンジャロカ。(最近は、毎年国鉄の値上げが決まっているけれど、あれは、どうしたものだろうか。)
23. (記録等を見て) コノゴロハ、マイトシイロンナコトガキマツトルナー。(このころは、毎年、色々な事が決まっているねえ。)

これらの例は、「動詞+ヨル」で習慣的な動作・作用が、現在も進行中であることを表現しており、また、「動詞+トル」は、習慣的な動作・作用が過去のある期間において行なわれ、それを現在確認出来るものについての、習慣の完了とでも呼ぶべき表現法である。

このことは、これらの動詞に〔+習慣〕とでも表記すべき意味素性を認定しなければならないことを示している。したがって、先の継続動詞・瞬間動詞の意味素性は、最終的に、次のようにまとめられよう。

II 継続動詞〔+時間・+継続・-継続・+習慣〕

このうち、〔+継続〕・〔-継続〕・〔+習慣〕は、文脈による相補分布をなす。

III 瞬間動詞〔+時間・-継続・+習慣〕

このうち〔-継続〕・〔+習慣〕は、文脈による相補分布をなす。

一方、松前町老年層方言におけるアスペクト体系は、次のようにまとめられる。

- A. 文脈によって〔+時間・-継続〕以外の素性が抑圧されている動詞+ヨル⇒未然
- B. 文脈によって〔+時間・-継続〕以外の素性が抑圧されている動詞+トル⇒已然
- C. 文脈によって〔+時間・+継続〕以外の素性が抑圧されている動詞+ヨル⇒進行
- D. 文脈によって〔+時間・+継続〕以外の素性が抑圧されている動詞+トル⇒已然
- E. 文脈によって〔+時間・+習慣〕以外の素性が抑圧されている動詞+ヨル⇒習慣の進行
- F. 文脈によって〔+時間・+習慣〕以外の素性が抑圧されている動詞+トル⇒習慣の完了

このように、松前町老年層方言のヨル・トルを中心としたアスペクト表現は、動詞と、それにかかわる文脈とによって、整然とした体系をなしているのである。さらに、ヨル・トル自身の中心的な意味も、次のよ

うに記述することができる。

ヨル⇒文脈によって既に定まっている前接動詞の示す動作・作用が、まだ終わっていないことを示す。

トル⇒文脈によって既に定まっている前接動詞の示す動作・作用が、既に終了したことを示す。

このヨル・トルの対立は、未完了・完了の対立とまとめて良い。

2. 松前町若年層方言のアスペクト表現

松前町若年層方言における、ヨル・トルを中心としたアスペクト表現は、老年層方言とは、若干異なった様相を呈する。ここでは、その違いについて報告する。

老年層方言では、前接動詞が文脈によって種々の時のとらえ方を決定され、その上にヨル・トルが未完了・完了の対立をもって後接し、様々なアスペクト表現をしわけているのであった。若年層方言でも、このアスペクト表現の枠組み自体は、老年層方言と全く同じである。しかし、その枠内を詳しく見てゆくと、次のような変化が起こっていることに気付く。すなわち、前記のCとEの枠が、次のようになっているのである。

C. 文脈によって〔+時間・+継続〕以外の素性が抑圧されている動詞+ヨルあるいはトル⇒進行

E. 文脈によって〔+時間・+習慣〕以外の素性が抑圧されている動詞+ヨルあるいはトル⇒習慣の完了

つまり、老年層方言でヨルでしか表現出来なかった枠が、若年層方言では、トルでも表現出来るようになっていたのである。言い替えれば、トルが、ヨルの領域に侵入して来ているのである。しかし、ヨルの領域すべてにトルが侵入してしまっているのではなく、Aの枠には侵入しておらず、ここは依然としてヨルのみで表現されている。また、C・Eの枠でも、トルがヨルを完全に駆逐しているわけではなく、ここでは、ヨルとトルが併用されているのである。B・D・Fの枠は、老年層方言と同じで、ここは依然としてトルによってのみ表現されている。

この、若年層方言のC・Eの枠における、ヨルとトルの併用は、表現上何の差もないいわゆる混同とは違い、同じ文法的(アスペクト的)枠内で、微妙な意味上の差を表現し分けているのである。

次に、Cの枠内での併用の例と、内省による表現上の差を見てゆく。

24. ヒーガ、モエヨルケン、アタレヤ。(火が、燃えているから、あたりなさいな。)

25. ヒーガ、モエトルケン、アタッテコイ。(火が、燃えているから、あたってきなさい。)

24は、発話者自身も火にあたっている。火は、発話者のところで燃えている。発話者自身が火をたいている時などの場合に使う。それに対し、25は、発話者は火にあたっておらず、火は他の所で燃えているような場合に使う。

26. アソコノ、イエ、モエヨッタワイ。(あそこの家が、燃えていたよ。)

27. アソコノ、イエ、モエトッタワイ。(あそこの家が、燃えていたよ。)

26は、今、現場から駆け戻って、息を切らせながら報告している感じがするのに対し、27は、遠い昔のことを回想している時の表現である。しかし、昔の出来事でも、真に迫って描写しようとする場合には、26の表現を使用する。

28. ヤヤガナキヨルゾ。(赤ん坊が泣いているよ。)

29. ヤヤガナイトルゾ。(赤ん坊が泣いているよ。)

28は、夫が妻に、妻あるいは赤ん坊の身になって、どうしたらいいだろうかと相談を持ちかけているような場合の言い方であるのに対し、29の表現は、亭主関白的な言い方であり、妻に対して、早くなんとかしろと言いつける時の表現。

30. オマエガ、ワライヨルトコ、シャシンニトツタゾ。(あなたが、笑っているところを、写真に撮ったよ。)

31. オマエガ、ワロトルトコ、シャシンニトツタゾ。(あなたが、笑っているところを、写真に撮ったよ。)

30は、いかにも笑顔がそこに見えてくるような、生き生きした表現である。それに対し、31は、証拠の写真でも撮った時のように、笑っている現場を写真に収めたのだぞという、確定的な事実を宣言しているような時のいい方。

32. フェ フキヨル。(笛を吹いている。)

33. フェ ファイトル。(笛を吹いている。)

32は、今、近くで、あるいは自分が笛を吹いており、発話者自身が音楽を楽しんでいる時のようないい方であるのに対し、33は、どこかで、だれかが笛を吹いているのが、自然に耳に入ってくるような時の、傍観者的な立場に立った時の表現。

34. イマ、イネカリヨル。(今、稲を刈っている。)

35. イマ、イネカトル。(今、稲を刈っている。)

34は、自分が稲を刈っている場合でないと使えそうもない。35は、人が稲を刈っているのを見ての表現。

36. ウシガ エサクイヨル。(牛が飼を食べている。)

37. ウシガ エサクトル。(牛が飼を食べている。)

36は、現に目の前で、牛が反芻している場面を見ての表現。37は、遠くから眺めている時、あるいは、自分に関係のない他人の牛が食べている場合の表現。

38. リヤカー、チャント、オシヨレヨ。(リヤカーを、しっかりと押しているよ。)

39. リヤカー、チャント、オシトレヨ。(リヤカーを、しっかりと押しているよ。)

38は、リヤカーを前で引いている人が、重さにあえぎながら、押している人に対して言う時の表現。39は、第三者が押している人に対して言う場合。

40. センセーノハナシ ヨーキキヨレ。(先生の話、良く聞いている。)

41. センセーノハナシ ヨーキイトレ。(先生の話、良く聞いている。)

40は、先生が教室で生徒に向かって注意する時の表現。それに対し、41は、家庭で、親が子に向かって言う時の表現。

42. マダ、アメ、フリヨルケ。(まだ、雨が、降っているかい。)

43. マダ、アメ、フツルケ。(まだ、雨が、降っているかい。)

42は、今から自分は出かけて行かなければならないのだが、もし雨が降っていればいやだなあと思っている時の聞き方。43は、雨など自分には関係ないけれども、ちょっと聞いてみようかと思った時の聞き方。

以上、わずかの例ではあるが、Cの枠でヨル・トルを併用している例を見た。いずれの場合でも、ヨルの使用されている表現は、場面を自分のものとして、主観的に表現しようとしている時のいい方であるのに対し、トルの使用されている表現は、傍観者として、客観的に、その場面から、ある程度の距離を保とうとした時の表現であることがわかる。同じようなことは、Eの枠でのヨル・トルの併用についても言える。

以上のことから、C・Eの枠でのヨル・トルの中心的な意味は、次のようにまとめることができよう。

ヨル⇒対象物を自分のものとして、主観的に見ていることを示す。

トル⇒対象物がある程度客観的に、距離をおいて見ていることを示す。

このように、ヨルの領域にトルが侵入し、その中で、アスペクトを軸とするヨル・トルの対立が、ムードを軸とするヨル・トルの対立に移行するという現象は、老年層方言にもわずかながら認められ、この移行が、

若年層方言になって突然起こったものではないことをうかがわせる。

元来、既然態・完了態を表現するトルは、その動作・作用が終了したという客観的事実をあらわすものとして用いられたはずである。何らかの圧力が体系をゆり動かし、トルがヨルの領域へ侵入するにあたって、客観性がそのまま残り、ヨルを主観的表現へと追いやって、現在のような意味分担が生まれたのだと考えることができよう。

一方、大阪・京都など近畿地方中部では、ヨルが軽い卑語として使用され、アスペクトを全く表現しなくなっているという事実がある。上に述べた、松前町のヨルの意味の変化は、大阪・京都のような、ヨルの卑語化への第一段階だと見ることができよう。主観的に、自分のものとして、ものごとをとらえた場合、必ず好悪の感情が入ってくるであろうし、また、感情の入っている語は、変化が激しく流動しやすいものであることは、「便所」を意味するのに、昔からどれだけ多くの語を必要としたかを見るだけでも明らかであるからだ。

3. おわりに

松前町老若両層方言のアスペクト表現について、若干の考察を試みた。一応、老年層方言におけるアスペクト体系、若年層方言における、その変化の実態を見ることが出来た。しかし、残されている問題点も多い。

私は、体系を比較することによって、その体系を同時論的に位置づけ、体系的な変化過程を再構成し、最終的には祖体系の再建を目指すという比較方言学の方法に最も注目している一人である。松前町老年層方言

のような、古い体系が、若年層方言の体系を通り、最終的には、大阪・京都などの体系へと変化してゆくのだと一応の結論は得たが、その間をうめてゆく、種々の体系を、今後発見し、ヨル・トルを中心としたアスペクト表現の体系的な変化過程を、もれなく再構成出来れば、と考えている。

なお、本論は昭和50年度、都立大学中本ゼミでの発表、ならびに、昭和51年、都立大学国語国文学会研究発表会での発表資料をもとにしている。ゼミに参加された皆様、研究発表会で貴重な御意見を賜った方々、また、老年層方言の話者となって下さった足立定子（明治34年生まれ）氏、若年層方言の話者となって下さった高橋雅彦（昭和29年生まれ）氏に、厚くお礼申しあげる。

〔参考文献〕

直接参考にしたもののうち、主なものをあげる。

- 金田一春彦、「国語動詞の一分類」『言語研究』第15集、1950
- 風間力三、「てみるのいひ方」『国語と国文学』第371集、1955
- 辰浜マリ子、「相生方言のアスペクト表現」『日本方言研究会第22回研究発表会発表原稿集』、1976
- 金田一春彦篇、「日本語動詞のアスペクト」麦書房、1976
- 辰浜マリ子、「相生方言のアスペクト——「居る」・「て居る」について——」、『都大論究』第14号、1977

〔1979・3・9 初稿〕

〔1979・3・17 再稿〕